

○平成二十五年 度

一 学 年 校 外 学 習

山寺の階段のぼり頂上へ芭蕉の想いまだまだ遠い
山寺の座禅で心落ち着かせ過去・今・未来考えている
座禅して心静まり心地よい今の時間が永久に続けば
広大な歴史感じる山形の木々を見上げて木漏れ日浴びる
まぶしくて目を細めたらその時にシャッターの音嫌な予感だ
模様付けもちの粘土に線を入れ不安と期待完成品に
微風が揺られる若葉眺めてるこれからの校外学習(とき)見守るように
陶芸でお皿を作り手を洗う手からほのかに粘土の香り
ハンカチを紅花の色染めてゆくハンカチの赤自分の心
紅染めできれいに染まった赤い布その布見ると香る思い出
涼しげな鳥がさえずる山麓ろくろ回して和の風情
紅の色に染まれしハンカチの白模様は心を表す
帰り道緑に染まった山見つつ今日の出来事心に刻む
山形の平清水焼き気合い入れ努力がいつばい思い出完成
作品に一人ひとりが思いこめこねて回して命が宿る
美しき雪解け間近の田舎道川の流れが優しく速く
皿だつて過去に戻ると土粘土こねて回して魂宿る
蔵王の地自然の山に囲まれて人の心も透き通るなり
蔵王にてピザ作りする私たち天気と草花応援してる
山形でピザを作るよ一からみんなで作ると倍おいしいな
ピザ作り仲間と育む豊かな心笑顔あふれる山形の旅
土をねり時を忘れるひとときは魔法にかかる平清水焼き
春景色「旅のキャンパス」いろどられ心がはずむ会話もはずむ
山形でできた作品うまくいきクラスに馴染み思い出の日に
バスの窓のぞいて見ると雪残る蔵王連峰心がはずむ
そばたちが美味しくなつたうれしいな笑顔の魔法かけたおかげだ
粉まみれみんなでやったそば打ちで歯ごたえあつた手作りの味
粘土たちさわり回して切つてねり愛情をこめ命を宿す
「ひやつこいな」冷たい粘土こねるうち胸から沸いた温かいもの
バス車内バスデーソング響く中友は祝われ十三になる
山形の春の草花集めつつ花の香りに安らぐ心
母の日にハーブでつくるプレゼントあげてしまうのもつたないいな
平清水春の湯のみを作りつつ職人の腕ただ憧れる

たくさんのさくらんぼたち白い花もうすぐ実る赤い宝石
バスに揺れ山形へ行く仲間たち想いを描く心に残る
この星の数ある生命うしなわれなくなる分だけ人は食する
五月晴れ動植物が共生し風がひと吹き春を咲かせる
土粘土形をつくる懸命に上手くいくよう想いをこめて
春日和桜の咲いた山形に響き渡った土鈴の音色
心こめ筆で絵付けし土鈴は人の感情こめられている
鮮やかな音の具が映える純白の土鈴の絵付け初体験
何色の服着せようか困っちゃうカラフルつける土鈴絵付け
無の世界そこから悩み色描く土鈴の音色周囲に響き

二学年野外活動

山の中ずらりと並ぶ白樺は雷の中堂々と立つ
久慈層群永い時超えたどりつく恐竜時代のタイムカプセル
山の中自然の香り虫の音鳥の鳴き声耳にやきつけ
山の中霧に包まれ歩き見た白樺林は初夏の雪山
風鈴の音鳴り響く十時半無人の廊下民泊の夜
新緑の木々の隙間に光あり見つけた先に今を感じる
目をつぶり見返り広がる若草色『またいつかね』と一人呟く
草木たちそよ風吹かれ躍り出す僕もつられて口笛吹いて
ブナ林鳥の鳴き声重なりて急な坂道もくもく登る
手のひらにのりし小さな琥珀には長い歴史がぎざまれている
青々と茂る木の葉にそよぐ風木の芽かじかむ久慈の明け方
三日間久慈市で知ったあたたかさここは私の第二の故郷
炭窯の煙たなびく久慈の町煙越しに見る青き山脈
今日終わりしおりに書いた出来事が増えていくたび寂しさつのり
カヌーこぎ友と遊んだ湖の水面に映る二人の姿
帰路のバス窓から望む首都の夜景友と見渡す光のかげら

三学年修学旅行

知らぬ都会空から見渡すその景色日本の大きさをわたしの小ささ
心おどる東京の夜は光り輝き眠ることなく動きつづける
怪人の歪んだ愛情悲しげで観客まきこみ静かに散った
そこまでは大きくなかったスカイツリースカイツリーより大きくなりたい
何よりも人を助けるその仕事一人一人の言葉が重い
空高く雲の上より眺めれば背くらべしているビルたち見ゆる

登りけり武蔵の頂き晴れ空に高鳴る想いは天を貫く
仲間との最初で最後の長旅は友の優しさ永遠に輝く
家に着き出したカメラは軽いのに思い出ぎつしり詰まっているよう
ハピネスを仲間と共に分かち合う夢の一日十四の春
恋焦がれ手に入れたモノ逃げて行く狂った愛は人をも惑わす
夢の国高鳴る鼓動はシンデレラ魔法がとけた午後八時半
東京のシンボルつとめるスカイツリー空から眺める日本の中心
幕上がるとびこむ光歓声が我をいざなう夢の世界へ
五十秒エレベーターに乗っていく世界に誇る日本の技術

一学年合唱コンクール

緊張で間奏途中に足震え歌い終わると肩軽くなる
ライト下キラキラ光る私達よく聴いててね努力の響き
独唱が重なり合つて合唱に皆の心も一つになつて
朝練習眠くなるけど遅れない最高の場所へ友と行くため
秋の朝クラスに響く歌声は落ちる木の葉の声のようかな
ステージに立つた瞬間よみがえる友と楽譜を読み合つた日々
びびらずに声を出せよと温かい言葉が今も記憶に残る
コンクール終わつたのにも関わらず自分の心まだ踊つてる
歌声をホール一杯響かせたあの日あの時今も思い出す
寒朝にクラス皆で集まつて誰より熱く歌つた廊下
舞台袖少し緊張入り交じるアナウンスの声笑顔で一步
友の音よく聞きながら奏でてく自分の音に自信を持つて
次々と迫ってくる歌う時さあ本番だ勇気を出そう
コンクール歌い終われば涙あり全力の意味知つた一日
次々と発表されるドキドキで心臓出そう誰か止めてよ
舞台裏みんなの顔が青ざめて小さい声で襟を確認
練習の終わりを告げるチャイム鳴り気合いを入れる円陣を組む
鳥肌が立ちつばなしで直らない人の心を響かせる歌
木漏れ日に奏でる歌が響いてく聞こえてくるのはたくさん声
コスモスを皆が笑顔で歌う度一つになつてく皆の気持ち
秋空に響き渡つた皆の声絆深まる笑顔になれる
精一杯歌つた後に手をつなぎ思いは一つ発表を待つ
出番前みんなの顔を見るたびに安心感がこみあげてくる
舞台裏友と目合わせ大丈夫緊張捨て去りいざステージへ
この場所は光あふれる大舞台全ての思いここにぶつける

歌声がみんなの心をつないでく音色にのせて空まで届け
目に見えず耳で感じる感動を届けてくれた僕らに感謝

二学年合唱コンクール

朝練習寒いと言つて身寄せ合う一度歌えばすぐ温まる
本番で最後に組んだ円陣が今もまぶたにフラッシュバック
教室の冷たい空気響かせて残る音符に声あたたまる
声からし届けと願う胸の内言葉一つに想いをのせて
足早に駆け出す心なりひびく踏み出す一步ステージ目指す
半年間過ごした思い出歌に乗せ届けた僕らは時の旅人
秋風に乗せて聞こえるハーモニー届けこの歌届けこの声
届けよう心震わす合唱を破れた楽譜は努力の証
本番前口元を上げ「楽にね」と背中をたたく仲間の姿
譜面から浮かぶメロディー語り合う気持ちを重ね空に届けよ
前を向き今ステージへ歩き出す友との手紙お守りにして
全員で試行錯誤を繰り返すみんなの仲も深まる予感
ステージに光をまとい立つ僕ら一度きりの歌声響く
秋空へ響くメロディー空を衝き心晴れ晴れみんなも笑顔
歌声が光をまとい輝いて限りなき音色創作したり
舞台降り余韻にひたり思い出すうつむいた日々笑つてる今
暗闇を抜けて光の差す方へ高鳴る胸で足早になる
練習でぶつかる仲間見るたびにみんなの本気つたわつてきた
三部四部一味違う音が有り声は違えど響きは一つ
三ノ二の不響和音のその先に待っていたのは最高の歌
緊張をくちびるかんでおしころしそして本番最後の舞台
学舎に響く歌声高らかに届け我らの想いを乗せて

三学年合唱コンクール

息つきや強弱さえも高い壁楽譜の書き込み努力の数に
確固なる熱き思いをひた感じ舞台上がりて指揮者見つめ
ありがどういつも言えないこの気持ち歌で届ける感謝の心
頑張れと背中押される友の声呼吸整えソロを奏でる
エブリディクラスみんなで奏で合い絆深まりクラス一つに
舞台立ち心ひとつに今歌う自信に満ちた響き輝く
言霊に込めた思いはホールへと体中へと響き渡る
一曲に込めた思いはみな同じ最後にかける思いは熱い

人のこら歌いし時のあの顔は思い届ける光表情
胸の中燃ゆる思いを募らせて響かせたるは我らの声を